広報 市制施行30年記念

しろいし

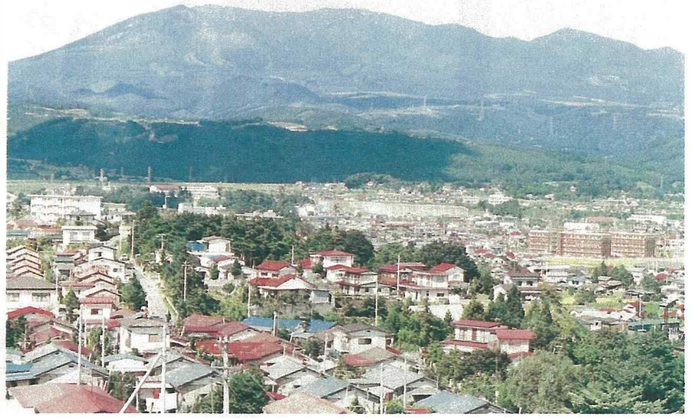
特集号

58年
11月30日

編集と発行　白石市役所総務課・宮城県白石市字桜小路35・・印刷　鈴木印刷所

白石市と登別市の姉妹都市提携盟約調印式

関連記事10～11ページ掲載



市制三十年を迎え

白石市長
関谷宗一

今年で、本市が市制三十年を迎えたことは、市民一同とともに私のもっとも喜びとするところでございます。

顧みますれば、昭和二十九年四月、一町六ケ村が大同合併し、市制を施行して以来三十年、この間、大都市圏への人口流出などによる過疎化現象を呈した時期はあったものの、おおむね人口四万一千台を維持しながら、調和と均衡のとれた都市づくりを目指し、市民ともども都市基盤の整備促進、産業の振興、生活環境の改善、社会福祉及び教育文化の向上のために渾身の努力を重ねてまいりました。

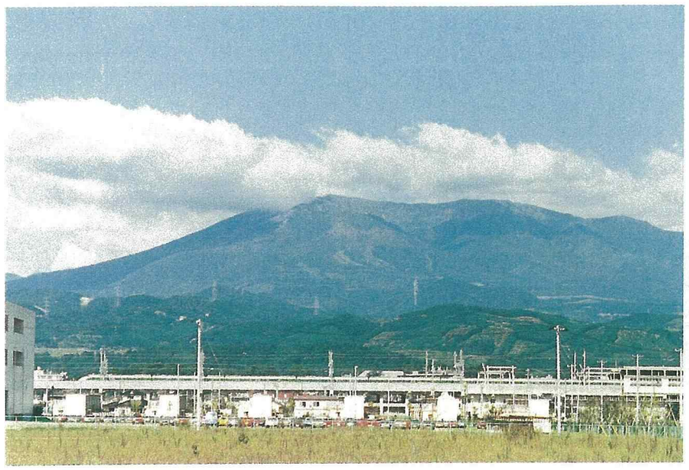
その結果、現在四万二千三百余を数え、市内の主要道路はもとより、ほぼ全域にわたっての道路網が整備されるとともに、公営住宅の建設、上水道区域の拡大、し尿ごみ処理体制の確立強化等、快適な生活環境づくりの整備が着々と進みました。また幼児教育、学校教育、社会教育の場としての保育園、学校、公民館、図書館等の施設、設備の整備促進を強力に推進する一方、地場産業の振興、優良企業の誘致等によって小都市ながら均衡ある発展をとげてまいりました。

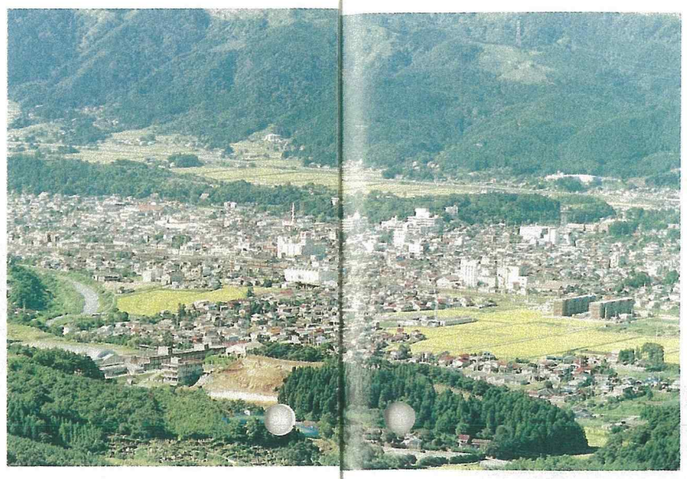
これらは、先輩市長の優れた政治力、これを支え援けた議会関係者の理解と協力、市民の勤勉にして真摯なまちづくりへの情熱の結晶であり成果であったと信ずるものであります。

ご了承のごとく白石市は、仙南地域における中心都市にふさわしい発展を期すべく昭和五十三年に、白石市新総合計画を策定し、この計画に基づきローリング方式による実施計画を作成し、実施してまいりました。しかし、近年国家財政の危機的様相を反映し、当市財政も年をおって逼迫の度を加え、計画された事業の一部が繰り延べのやむなきにいたるなど、はなはだ残念な事態も生じております。

一旦計画した事業、特に市民生活にとって喫緊の課題となっている事業は必ず実行しなければなりません。財政難は深刻でございますが、市民各位の英知と絶大なる協力をいただきながら、個性ある豊かな都市づくりのために、全力を尽くす所存であります。

最後に、市制三十年を契機に、市勢の飛躍的進展のため、市民の総力を結集し、あらゆる努力を尽くすことを誓いまして、はなはだ簡単ではございますが、記念のあいさつといたします。





市制三十年に思う

白石市議会議長
小室欣一

白石市制施行三十年記念にあたり、市議会を代表し、一言ごあいさつ申しあげますことは誠に光栄であり、四万二千市民の皆さまと共にお慶びにたえません。

わが白石市は、宮城県の玄関口として古くから固有の歴史をもつ由緒ある市であり、名実共に仙南の中心都市として大きく羽ばたこうとしています。

さる、昭和二十九年四月に、一町六ケ村が合併し市制を施行、さらに、小原村を合併し県下一の広い面積を有する白石市が誕生したことはご承知の通りであります。

以来、三十年の歩みは、多くの難題を解決する道でもありました。合併当時、四万六千六百七十人の人口は、その後、減少の一途をたどり、昭和五十年には、四万八百六十二人までの落ち込みとなりました。

この人口構造の変化の理由として、農業基盤整備の立遅れ、思うにまかせない企業誘致による雇用問題、商業・観光等のサービス業の停滞があげられると思います。

これらの諸問題解決の施策として、昭和五十三年に市の新総合計画が立てられ、停滞している経済環境改善と、あわせて都市づくりの見直しなどを含めた新しい計画が策定されました。

新幹線白石蔵王駅の開業、東北日通工の誘致は、活力ある白石市の発展を目指すうえで大いに期待されるものがあります。人口も本年八月現在で、四万二千三百八十二人と微増の傾向にあり都市の活力を知るバロメーターとして、大いに発展が期待されるものがあると思われます。

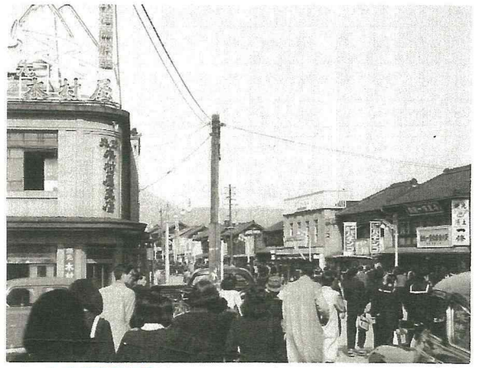
これからの当市にとって、新たな観光都市としてのまちづくり〝個性豊かなまちづくり〟を推し進めるうえで、住民参加による創意工夫の行政も大事でありましょう。

さらに、白石蔵王駅と国道四号線を結ぶ、森合雁狩橋線の早期完成、駅周辺と在来駅を結ぶ交通網の整備、蔵王山麓に建設される青少年野外活動施設や工場の誘致、下水道事業の整備促進など、数多くの問題が山積しております。市議会としては、これらの諸問題を解決するためには、財政事情等による種々の困難が伴うものと思われますが、白石市が今後、更に大きく飛躍するために努力していく所存であります。

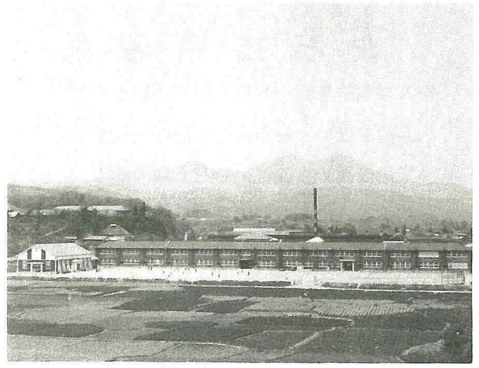
最後に、市民の皆さまが安心して暮せる〝健康で豊かな都市づくり〟に今後とも全力を挙げ努めてまいりますので、なお一層のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申しあげごあいさつといたします。

なつかしい　しろいし

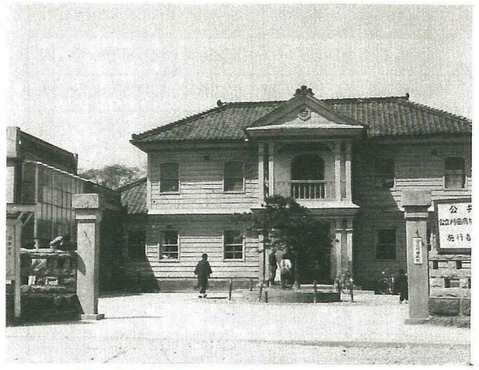
▲白石市誕生（調印式）



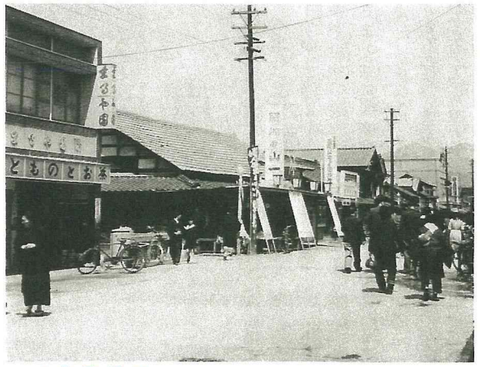
▲白石駅前通り



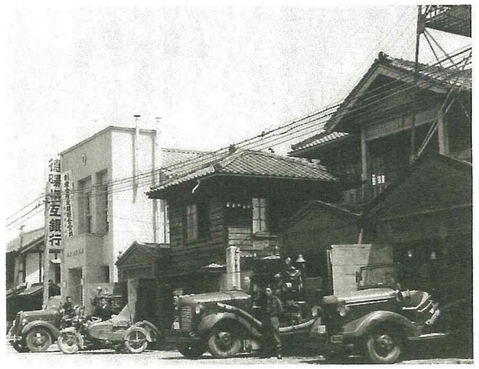
▲白　石　中



▲刈田病院（旧中央公民館）



▲中町通り



▲消　防　署

▲白石市公会堂

▲水道管工事

歴　代　市　長

麻生　寛道

鈴木孝一郎

関谷　宗一

■ 歴代議長

代順	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	上杉　喜書三郎	昭29. 4. 14	昭30. 3. 31
二代	太宰　虎太郎	昭30. 4. 12	昭34. 3. 31
三代	太宰　虎太郎	昭34. 4. 7	昭38. 3. 31
四代	庄司　猛太郎	昭38. 5. 20	昭41. 9. 26
五代	飯沼　吉右エ門	昭41. 10. 3	昭42. 4. 29
六代	阿部　燁尾	昭42. 5. 16	昭42. 8. 8
七代	保科　善久	昭42. 9. 18	昭46. 4. 29
八代	山田　活吉	昭46. 5. 17	昭48. 3. 22
九代	黒沢　登	昭48. 3. 22	昭49. 4. 29
十代	大野　彦七郎	昭49. 5. 21	昭50. 4. 29
十一代	遠藤　倉雄	昭50. 5. 15	昭54. 4. 29
十二代	斎　彦一	昭54. 5. 7	昭58. 4. 29
十三代	小室　欣一	昭58. 5. 12	在職中

■ 歴代副議長

代	氏名	就任年月日	退任年月日
初代	松田　成一	昭29. 4. 14	昭30. 3. 31
二代	阿部　燁尾	昭30. 4. 12	昭34. 3. 31
三代	阿部　燁尾	昭34. 4. 7	昭38. 3. 31
四代	保科　善久	昭38. 5. 20	昭42. 4. 29
五代	斎　彦一	昭42. 5. 16	昭46. 4. 29
六代	斎　彦一	昭46. 5. 17	昭50. 4. 29
七代	矢ノ目　八蔵	昭50. 5. 15	昭54. 4. 29
八代	橋本　徳四郎	昭54. 5. 7	昭58. 4. 29
九代	吉見　三代治	昭58. 5. 12	在職中

■ 市の歴代三役

(1) 市　長

代	氏名	就任年月日	在職年数
1～6	麻生　寛道	昭29. 5. 12	22年5ケ月
7	鈴木　孝一郎	昭51. 11. 14	4年
8	関谷　宗一	昭55. 11. 14	在職中

(2) 助　役

代	氏名	就任年月日	在職年数
1～6	阿部　末吉	昭30. 6. 1	22年4ケ月
7～8	高橋　亨	昭52. 1. 22	在職中

(3) 収入役

代	氏名	就任年月日	在職年数
1～5	管野　長蔵	昭30. 5. 13	20年5ケ月
6	斎藤　皆五郎	昭51. 1. 1	2年3ケ月
7～8	半沢　嘉一	昭53. 5. 5	在職中

白石市民憲章

雄大な蔵王を仰ぐわたくしたち白石市民は

自然を愛し　住みよい白石を　つくります

文化を高め　美しい心をそだてます

健康で　あたたかい家庭を　きずきます

仕事にはげみ　豊かな郷土を　つくります

きまりを守り　明るい社会を　きずきます

白石町制施行　最初の予算書をみる

風間　観静

明治二十二年（一八八九）四月、初めて近代的な市制・町村制が施行された。旧白石町と福岡・白川・大鷹沢・大平・斎川・越河・小原の七ヵ村がいまの市域に成立をみた。最近、発見された「明治二十二年度白石町歳出入予算表」（紺野良輔氏蔵）で、九四年前の白石がどんなものだったかを紹介してみよう。

新町制は四月発足のため、新年度予算は五月から翌年三月まで十一ヵ月で組まれている。

歳入は**経常費**（九九％）と**臨時費**（一％）から成り、**総額四千五百二十五円**（銭以下省略）であった。この内訳は次の通り。

(1) 手数料　四十三円。所得税や営業税など町が国税を徴収する際の一定の手数料収入。

(2) 雑収入　九百七円。小学校授業料や不用品払下げ金など。

(3) 前年度繰越金　百九十六円。旧白石本郷から引き継いだもの。

(4) 町税　三千三百七十九円。地租、営業割、戸数割などで全収入の七四・六％に当る。現在の市税収入が全体に占める比率二十五・六％と比較すると、ずっと昔は健全だったことがわかる。

次に歳出予算はどうか。経常歳出は、四千四百四円（九七・三％）。**臨時歳出**は百二十一円（二・七％）で合計四千五百二十五円。臨時歳出は避病院隔離舎（伝染病患者収容所）の借入料が大部分を占めている。

歳出の経常費は以下の通り。

(1) 役場費　千四百六十円。内容は㋑収入役（月額八円）以下、役場吏員の給料（書記など総数八人）。㋺雑費で報酬、旅費、実費弁償費など。㋩需用費で備品、消耗品、賄料など。㋥修繕費の概ね四項目となっている。現在と変っているのは町長と助役には報酬で支給され、町長年額百六十五円、助役は八十八円であった。月額で計算すると三役でも、町長が他の二役の倍近くもらっている点が今と違う。

(2) 会議費　百二十二円。町議会関係の費用で、町議会は一カ月二日平均、議員の実費弁償は一日二十五銭。その他、印刷、消耗品、書記給料などだった。議員の旅費は計上されていないから、出張は無かったらしい。

(3) 土木費　四百七十四円。道路建設と修繕の工事費。橋梁架設と修繕費。堤防費。樋管費といって用水堀や通水路の補修管理代。水門費は水門のごみ除け、水門のつけ替工事費など。河溝費は蔵本大堰や館堀、沢端川の浚せつ費などであった。

(4) 教育費　千七百八十九円。これは最大予算で、高等小学校及び尋常小学校関係の給料、旅費、生徒奨励費、備品、消耗品代、各種修理費である。当時の白石小学校は高等科と尋常科を併せ持っており、校長は兼務で給料月額二十五円。町の三役よりずっと高かった。教員は八人で平均一人八円ほど。生徒奨励費は卒業式と運動会のときの賞品、賞状代。生徒十人に一人当てで計上してあるから相当多数の生徒が賞をもらった筈である。

(5) 衛生費　三十九円。薬品代、寝具代などとあるから、伝染病対策費でもあったか。

(6) 警備費　三十円。消防夫手当、ポンプ修理代、郷倉（饑饉に備えて貯える穀物倉）の番人手当などである。

(7) 勧業費　百六十七円。いまの商工、農林関係費のこと。しかし内容は獣医育成補助、養蚕改良奨励費が大部分。養蚕の奨励と家畜（牛馬）の保護は大切な産業対策だった。しかし当時は農家や商工業者に直接の補助対策はまったくしていない。

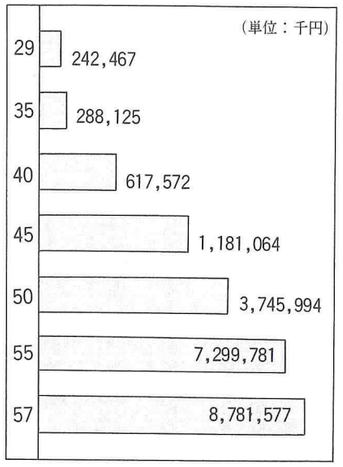
(8) 町村公債費　二百九十八円。各種借用金の返済分で、従前の町の債権償還に当てたらしい。

(9) 予備費　二十五円。

残念ながら同年の他の村々の記録は発見されていない。翌二十三年の福岡村と白川村の予算記録は残っている。それによると福岡は約二千四百九十円、白川村は八百七十五円の規模だった。これらをもとに推計すると村分の合計額は一万一千七百七十円、これに白石町分を加えると一万六千五百円になり、これが当時の一町七ヵ村の総予算である。昭和五十八年度白石市当初予算額は七十一億六千三百万円だから四十四万七千六百倍にふくれたことになる。当時と今の米価では一万八千倍、大工手間で四万三千倍だから、自治体予算の倍率はすさまじい。ごく大ざっぱな計算といいながら、市制三十年を迎えた白石市が財政的に大発展をした様子が明白にわかり興味深いものがある。

白石市財政

《市政以来歳出決算額一覧》



市制施行三十年記念
表彰おめでとうございます

市制施行三十年記念式典が、去る十一月二日市民会館で盛大に開催されました。式典では、札幌市長、登別市長、地元仙台市長などのご臨席のもと、各功労者への表彰が行われました。

表彰者は、市制施行三十年記念功労者六名、市表彰条例に基づく表彰者百八名（特別自治功労者市職員含む）の方々です。表彰されましたみなさまに心からお祝いを申しあげ、今後のご活躍とご健康をお祈りいたします。

市制施行三十年記念 市政功労者

笹　豊二（前市医師会長）
日下　宗二郎（市監査委員）
大野　彦七郎（元市議会議長）
黒澤　登（元市議会議長）
細田　栄郎（市陸上競技協会長）
徳力　紀子（白石刈田更生保護婦人会長）

自治功労者（特別表彰）

遠藤雄三（前県議会議員）、山谷宗吉（現市議会議員）、高子太惣（白石財産区議会議員）、佐藤内蔵雄（越河財産区議会議員）、角張新一郎（大鷹沢財産区議会議員）、岩松作雄（小原財産区議会議員）、山谷康（福岡財産区議会議員）

自治功労者（一般表彰）

大槻慶治郎（市議会議員）、松本正男（市議会議員）、半澤良吾（市議会議員）、高橋吉之（小原財産区議会議員）、佐藤政夫（福岡財産区議会議員）、大場忠輔（小下倉行政区長）、相原武雄（白川四区行政区長）、故・佐久間幸男（前越河七区行政区長）

納税功労者（団　体）

羽山納税貯蓄組合（白川）、第六区上組納税貯蓄組合（越河）、坂谷東納税貯蓄組合（大平）、斎川中央納税貯蓄組合、追ノ倉納税貯蓄組合（小原）、山ノ下第一納税貯蓄組合（福岡）、大鷹沢第二区納税貯蓄組合、東益岡納税貯蓄組合。

産業功労者

佐藤一二（市養蚕農協副組合長）、大浦吉見（小原和牛部会会長）、高橋一男（市深谷牧野農協組合長）、高橋亮（大鷹沢たばこ耕作組合組合長）、鹿又喜男（福岡土地改良区理事長）、長谷川新吉（㈱八百新取締役）、日下俊雄（資）吉見製麺所工場長）、高橋傳（白石興産㈱専務取締役）星正夫（㈱北斗食品専務取締役）、四竈栄子（㈱旅館かつらや代表取締役）、渡辺正雄（白石こけし業協同組合理事）、猪狩勝彦（遠刈田系こけし木地玩具製造業）、菅野得志（市商店会連合会理事）、斎藤昶（小原商業組合長）、小林新助（㈱白石物産商事取締役社長）

教育文化功労者

佐藤昇（市体育指導委員）、鈴木康弘（市体育協会理事）、川股兵三（市図書館協議会委員）、堀内美代子（市図書館協議会委員）、桂山信一（市斎川公民館長）、引地玄二（白石中学校校医）、武田直良（深谷小学校校医）、佐藤雄三（白川中学校校医）、佐藤壽（白川小学校校医）伊藤陽子（白石第一小学校薬剤師）、渡辺幸治（公認会計士）、中川常磐（蔵王スキー協会理事長）、白石市バレーボール協会。

公安消防功労

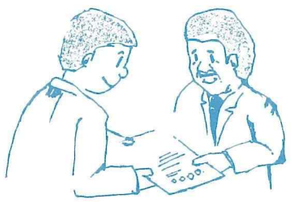
本郷第四防犯実働隊、斎藤好（白石交通安全協会企画広報部長）、宮崎昭吾（市交通指導隊副隊長）、半田明（市消防団白石分団員）、佐藤春雄（市消防団福岡分団員）、半澤貢（市消防団白石川分団長）、佐藤勇二（市消防団白川分団班長）、高子悦治（市消防団白石分団班長）、畑中一男（市消防団斎川分団部長）、鈴木好郎（市消防団福岡分団班長）、千葉一夫（市消防団福岡分団班長）

社会事業功労者

小室利夫（市民生児童委員）、柳田初男（市民生児童委員）、平間勝郎（市民生児童委員）、岩渕かめよ（市民生児童委員）、半澤幸蔵（市民生児童委員）、日下満雄（市民生児童委員）、半澤かづ子（市民生児童委員）、風間圓静（保護司）、斎藤きくみ（白石刈田地区更生保護婦人協議会理事）、鈴木トミ（白石刈田地区更生保護婦人協議会理事）

篤　行　者

白石建設職青年会、白石市立小原小学校父母教師会、日下賢一、鈴木貞。



昭和五十八年度 教育功績者表彰

十一月五日、市役所大会議室で、教育功績者六名と感謝状贈呈者十名の表彰が行われました。

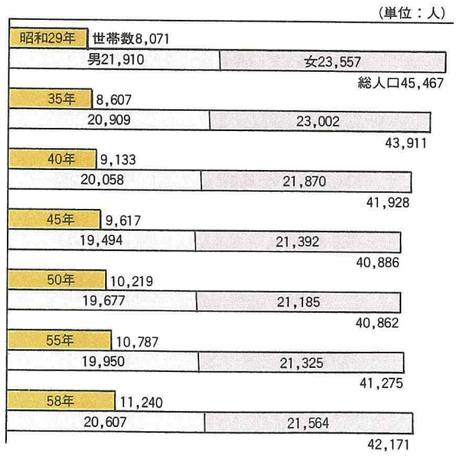
教育功績者

中幡操（市社会教育委員）、清原剛雄（市文化財保護委員会委員）、麻生靖子（市公民館運営審議会委員）、鈴木良二（市図書館協議会委員）、鈴木智恵子（市図書館協議会委員）、菊地常夫（有）白石電設代表取締役社長）。

感　謝　状

白石南リーグ・ソフトボール協会、白石市立大鷹沢中学校父母教師会、白石スタディクラブ、白南通信㈱、白石市第二幼稚園保護者会、越河建友会、佐藤舵美男、春山達一、真柄光喜、四竈栄子。

白石市の人口



白石市最高齢者

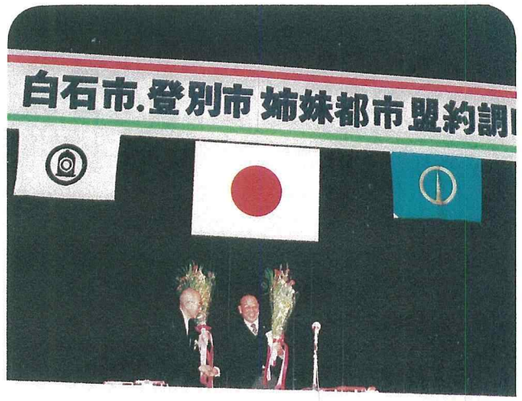
村上　とくさん

白石市斎川字亀田十番地
（明治十二年三月十四日生）

斎川に住む村上とくさんは、今年で満百四歳を迎え、市民最高齢者です。ふだん暖かい日は、日なたによく出たり、毎日好きなみかんの缶詰めを一缶食べ、三食のうち昼は、うどんを食べるなど過ごしています。

日課では、風呂炊きを受け持つなど一役するお元気な姿も！いつまでも、ますますのご健勝をお祈りします。

10月26日姉妹都市提携　白石市



名湯登別温泉を有する街　登別市

●登別市紹介

明治二年、白石城主の片倉一門が登別に入植して以来、風雪百余年。昭和四十五年に登別市として、道内三十番目に市制を施行。人口五万九千二百人（昭和五十八年六月末現在）を擁する、道内三十二市中、十三位に位置する中堅都市として発展しております。

登別市は、北海道西南部に位置し、面積二百十三・六〇㎢で、名湯登別温泉を有するため、まち全体が温泉街のような印象を与えています。市の北は高く、南は低く、火山地帯、台地、平野の三地帯にわかれ、東南は太平洋に面し、鷲別岬と富浦岬を除く海岸線はほとんど一直線をなしています。東北は臨海温泉、クッタラ湖など白老町と接し、西南は室蘭市と隣接する住宅密集地帯です。

市民の約七十％は、一般サラリーマンであり、隣接する室蘭市に職場を持っている、という典型的ベットタウンに変容しています。

まちの柱となっていた観光に、工業が関連し発展してきた登別市は、「観光と工業と学園都市」建設のまちづくりを目指した施策を推し進める一方、地方都市としての発展が期待されております。

白石市・登別市の概要

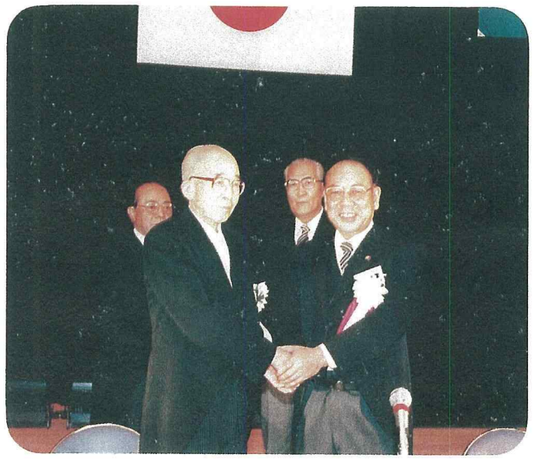
58．7　調

	白石市	登別市
市制	29．4．1	45．8．1
人口	42,316 人	59,225 人
世帯数	11,328 戸	19,018 戸
面積	285.94 ㎢	213.60 ㎢
議員	26 人	30 人
職員	437 人	630 人
58年度予算	一般会計　7,163,418 千円	一般会計　12,090,035 千円
	特別会計　3,380,803 千円	特別会計　5,772,951 千円
学校 小学校	10 校　3,825 人	11 校　5,875 人
中学校	6　1,774	8　3,010
高等学校	3　2,818	3　2,167
幼稚園	4　769	8　925
保育園	9　575	9　548
大学等		日本工学院北海道専門学校
就業人口（55国調）	1次　3,916（19.0%）人	1次　449（1.9%）人
	2次　7,160（34.8%）	2次　7,988（33.9%）
	3次　9,513（46.2%）	3次　15,156（64.2%）
主な産業	農林業・製造業 卸売小売業	観光・水産・工業
特産物	こけし・う～めん 和紙・みそ・清酒 漬物・足軽まんじゅう	わかさつこいも 木彫製品 熊まんじゅう
その他	小原温泉・鎌先温泉 白石スキー場 蔵王連峰・長老湖	登別温泉・カルルス温泉 登別スキー場・熊牧場 大湯沼・クッタラ湖 地獄谷

ホットライン第1号　両市出身者が挙式

登別市幌別町出身の佐野智徳（ともより）さんと白石市本町出身の重子さん（旧姓菅野）が10月９日めでたくご結婚しました。幸せな二人は、仙台で知りあい、ゴールイン。両市の姉妹都市提携の運びになっていた時でもあり、ホットライン第１号と祝福されました。ご両人は、仕事の関係で秋田市に住むことになりました。

登別市　調印式盛大に両市の契り結ぶ



十月二十六日、白石市と登別市の姉妹都市盟約調印式が中央公民館で、関谷宗一白石市長、中浜元三郎登別市長等両市関係者が出席して式典が挙行されました。歴史的なつながりを持つ両市のゆかりは、明治二年、仙台藩白石城主の片倉一門が、当時の幌別村に初めて入植するなど、血のにじむような思いで開拓した経過から深い結びつきがあります。

今回の調印は、当白石市が市制施行三十年を迎える記念行事の一つとして姉妹都市の縁組を結ぶことになりました。調印式では、高橋亨白石市助役の経過報告のあと、小室欣一白石市議会議長、室久吉登別市議会議長立ち合いのもと両市長が盟約書にサインをして締結文書を交換しました。締結後、両市長による「交流と親善を深め、両市発展のため力を合わせよう」とあいさつがあり、市木の交換、記念講演、祝賀会を開いて親睦を深めました。

交流の経過

明．2．12　片倉景範（藩主邦憲の代理として）幌別郡に入る。
明．3．6　片倉邦憲以下21戸入植。
明．4．4　片倉家臣45戸入植。
明．20．　片倉景光幌別郡に入る。
昭．42．1　登別町長岩倉誠一以下市史編さん委員白石市訪問。片倉家を囲んで座談会開催。
昭．55．8　白石青年会議所（ＪＣ）が、登別青年会議所（ＪＣ）訪問。
昭．56．1　登別ＪＣ総合企画委員会内に姉妹ＪＣ検討委員会設置。
昭．56．5　教育次長及び郷土資料館専門委員白石市訪問。
昭．56．8　白石市長一行44名、オープン前の郷土資料館見学。
昭．56．9　片倉忠光・関谷宗二夫妻郷土資料館開館式に出席。
昭．56．9　登別市在住旧白石藩出身者で、白石刈田会結成。
昭．56．9　市長・総務課長白石市を訪問。
　　登別市議会社会党議員団と白石市長、片倉家を訪問。
昭．56．10　白石ＪＣ理事長以下10名が、登別ＪＣ訪問。姉妹ＪＣ提携について打合せ。
昭．57．1　登別ＪＣ総会にて、白石ＪＣとの姉妹ＪＣ提携議決。
昭．57．3　登別ＪＣ理事長以下５名白石ＪＣ訪問。
昭．57．5　総務部長・総務課長白石市訪問。
昭．57．5　白石ＪＣ登別ＪＣ訪問、姉妹青年会議所盟約
昭．57．5　白石市土地開発公社一行登別市訪問。
昭．57．7　登婦連一行７名白石市表敬訪問
昭．57．11　登別市職員等20余名が行政視察のため来白。
昭．58．3　登別市史編さん委員３名来白、白石市を中心に七ケ宿町、蔵王町等を現地調査。
昭．58．3　登別市シニアスカウト来白。

盟約書文写

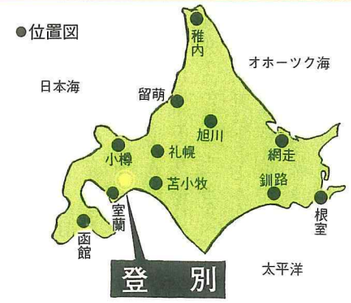
姉妹都市盟約書

白石市と登別市とは、相互に産業経済、教育文化、福祉の交流と親善を深め、両市民の福祉増進と市勢発展を図ることを目的として、ここに姉妹都市提携の盟約を締結する。

昭和58年10月26日

白石市長　関　谷　宗　一　㊞
登別市長　中　浜　元三郎　㊞

●位置図



ふるさとに生きる 地場産業

こけし・うーめん・和紙特集

こけしとその他の木地玩具

菅野 新一

こけしの誕生

現在、こけしといえば東北を思い出し、東北といえばこけしを思い出すぐらい、こけしが有名になり、東北の風物を代表しているかのようにみえる。

こけしは、もともと、東北の木地屋がロクロに掛けてつくるおもちゃ（**木地玩具**）のひとつで、決して美術品でも工芸品でもない。東北の木地玩具にはいろいろあって、こけしは、いわば、これらの木地玩具と兄弟分である。いままで、こけしとその他の木地玩具が別のものであるかのように考えられていたが、これは誤りである。それで今回は、こけしが木地玩具のひとつであるという見方から、題名も「こけしとその他の木地玩具」とした。ただ、いろいろの木地玩具のうちで、こけしだけは東北特有の玩具で、東北以外の地方でつくられているにしても、東北で木地挽きを習得した人たちによってである。

どうしてこけしだけが、ほかの玩具と違って東北特有の玩具かと聞かれても、はっきり答えることはできない。要するに東北の風土そのものが、こけしという子供相手の素朴なおもちゃを生み出して育てるのに適していたためではなかろうか。

徳川時代の中頃までは、物資の点からいっても、気持ちの上からいっても、東北の貧しい一般庶民階級は自分の子供たちに、たやすく人形をつくってやることも買ってやることもできないような環境にあった。しかし、時代が移り変り、東北の湯治場がだんだん開けてきて、農家や商家の人たちが保養のために、ここに大勢集るようになった文化（一八〇四年～一八一八年）、文政（一八一八年～一八三〇年）ごろになると、仙台の**堤土人形**や**張子のおほこ**の影響を多分に受けて、湯治場や、その近くに住む木地屋たちが、どこの山にも豊富にある木材で目鼻を付けた人形をつくって湯治場みやげに売るということが、いかにも考えられるような環境になった。つまり、なにかしらの人形を親につくってもらうか買ってもらうかして遊んでみたいという東北の子供たちの気持ちと、子供相手の人形をつくって湯治場みやげのひとつとして売って生活のたしにしようとした木地屋の気持ちとが触れ合い重なり合って、ここに東北特有のこけしが誕生し、育てられてきたのである。堤土人形と張子のおほこをつくった仙台に近い宮城県の遠刈田と鳴子と弥治郎とが、こけしの発祥の地となり、ふるさとなったのも、このような時代的背景をよく物語っている。

▲弥治郎こけしの絵付け　鎌田文市さん

こけしの系統

こけしには十の系統がある。こけしをつくる木地屋の次男なり、三男なり、また、弟子たちが技術を習得してから、他所に行って木地を挽けば自然とそこにこけしが生まれる。これは、どこの系統のこけしということになる。鳴子系（宮城県）、遠刈田系（宮城県）、弥治郎系（宮城県）、土湯系（福島県）、作並・山形系（宮城県と山形県）、蔵王高湯系（山形県）、肘折系（山形県）、木地山系（秋田県）、南部系（岩手県）、津軽系（青森県）がこれである。

こけし以外の木地玩具

郷土玩具としての木地玩具は、木製の玩具のうちで木地屋がロクロに掛けてつくる玩具のことである。このなかには、こけしのほかに、やみよ、おしゃぶり、えずこ、臼と杵、あれい笛、提灯ごま、追っ掛けごま、風ごま、水がめ、あひる、とら、つる、自動車、汽車、七福神、輪投げ、茶道具など、数多くの種類がある。東北の木地玩具には系統があり、同じ系統でも工人によってそれぞれ違うのが特徴で、これを集める人たちにとっても大きな魅力であり、また、楽しみである。

以上述べたのは旧型こけしのことであるが、このほかに白石では新型こけしもつくっている。このこけしの発祥の地は、白石市であることを忘れてはならない。旧型こけしと違って新型こけしは、系統や家柄に関係のない一般大衆のこけしとして時代とともに生きているのは、誠に喜こばしいことである。長い歴史と伝統を持っている旧型こけしとともに、近代的な感覚にあふれている新型こけしにも美しい夢を抱いて育てて行きたい。

▲玩具も制作されている

▲近代こけしと清原たかおさん

うーめんの由来

小岩 庄一

麺は飛鳥時代に仏教と共に中国から伝えられたといわれている。その当時のものは、粉をねっただんごのようなものであった。それが禅宗の僧侶などによって、次第に細紐のように改良されて全国に広がったものと考えられている。

白石に麺の作り方が、いつ伝わったかは、はっきりわからない。しかし次のような由来が伝えられている。

三百年ほど前、白石短ケ町の検断、鈴木久佐衛門が胃病で食欲がなくて、苦しんでいた時に息子の浅右衛門が父親の好きな麺を食べさせたいと思ったが、医者に油を使った麺は病気に悪いといわれ、油の入らない麺をさがしたが求めることができなかった。ある時、旅の僧侶から油を使わないでできるそうめんのあることを聞き、その作り方を教わり、早速作って父親に食べさせたところ、消化がよく、食欲がでてきて、間もなく、長わずらいの胃病もすっかりよくなった。

浅右衛門はこの作り方を人びとに知らせ広めた。町の人たちは浅右衛門の親孝行をほめ、その温かい心くばりに感謝して温麺と呼ぶようになった。

その後、温麺は白石の殿様も食べられ、さらに仙台の殿様にもあげたところ、大変喜んで、帯刀を許され、浅右衛門は味右衛門と名を変えるように命ぜられた。それからは、鈴木家では代々味右衛門を名のり、作る温麺も御膳温麺と名付けられた。

温麺が白石の産物として、よその人びとに知られるようになったのは、殿様の片倉氏が、和紙作りや葛粉の製産とともに製麺を奨励したこと、また白石は山地が多く、傾斜地のために水量が豊かで、水車での粉ひきに好都合であり、冬は北西の風が吹き、乾燥するという自然の条件が、温麺の製造を盛んにしたためである。

当時の手延べ温麺一把は、長さ八・五センチ、目方は一八〇gで細い和紙でまん中をしめ商標を印刷した紙で巻いたものである。

手延べ温麺の中でも御膳温麺は、特に鈴木味右衛門の家で作った温麺にだけつけられた名前

白石和紙とその応用品

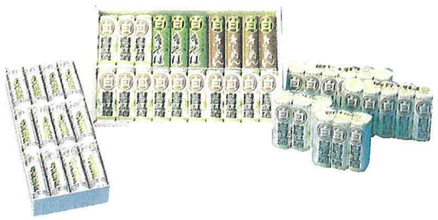
みちのく紙から白石紙へ

菅野新一

で、お土産や贈物に用いられ、昔は白石や仙台の殿様の御用品にもなった。

それは、ほかの温麺と違って長さを三十三センチに切り、直径を三センチにして束ね、両端を細い紺色の紙で巻き、まん中に幅三センチの商標紙を張り付けたものであった。一本一本はとても細くそして長く、上等な品質と美しい姿をほこりにしていたものである。

恵まれた自然の条件と長い伝統の中で磨かれた手延べ温麺の製造は、大量生産が困難であり多くの時間と労力を必要とするこみ入った手仕事のために、時代の移り変りには追いつけずに昭和二十年代の後半には、手延べ温麺は、白石ではまったく作られなくなった。



▲白石温麺

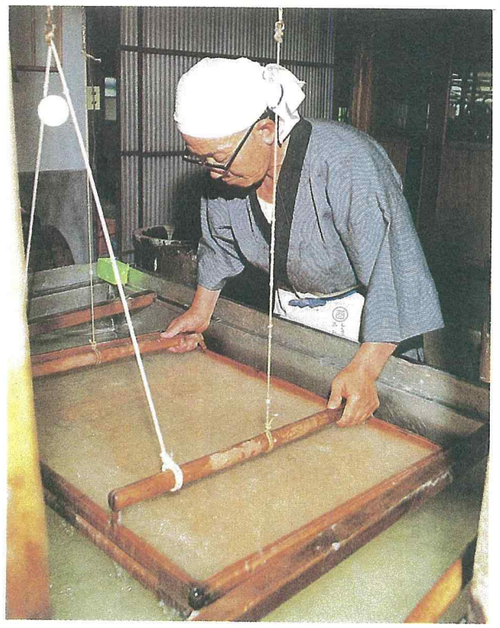
一方、明治のなかごろから製麺機による製産が開始されたが最初は機械の操作がうまくできなくて、失敗をくりかえしたが、大量生産や省力化などの利点は、手延べ製麺から機械製麺へと交替させた。

しかし、製麺は機械でも乾燥は相変らず自然乾燥なので、西風が吹けば温麺屋はえびす顔、東風（沖上げ）が吹けば青菜に塩などといわれたほどに、天候に左右されることが多かった。それでも冬に作る寒製と銘柄づけられたものは、味もよく、長く保存できるので人びとからは喜ばれた。春製や秋製も生産されたが、大量に作られたのは夏製である。夏製は六月から八月までのもので、温度が高いので塩の量が多くなるので、湿気をおびやすく、長い保存は無理なので、盂蘭盆での大量の消費をねらって作られたが、寒製にくらべて品質は劣り、安値で取引きされることが多かった。

今では機械化が進み、仕上げは温風による乾燥をとり入れているので、天候に左右されることがなく、年間を通して仕事ができ、その上に衛生的で品質の一定した温麺が生産されるようになった。

陸奥国の産で、主に京に送られ、種々のすぐれた地方色をもつために平安中期からその名を現わしてきた。うるわしき紙、みちのく紙は、はたして東北のどの地方で漉かれたかは、この紙のたしかな記録が残っていない今日、ただ当時の奥羽拓殖事情や紙の産地の歴史から想像すると、宮城県の南部と福島県の阿武隈川とその支流に散在する和紙の産地、さらに具体的にいえば、宮城県の伊具郡と刈田郡および福島県の伊達郡と安達郡などが、みちのく紙の有力な候補地ではなかったろうか。みちのく紙の産地については、だいたい以上のような推定も可能であるが、後世、いわゆる白石紙の産地となったのは、刈田郡地方であり、そのうちでも白石川の清流にのぞむ蔵王山麓の山村地方であった。この地方の紙漉きが名実ともに盛んになったのは、近世初期のことである。

旧藩時代、刈田郡には数百戸の紙漉き農家があり、ここで漉かれた紙が刈田郡の中心地である白石に集るのは二七の市といわれた二の日と七の日の市で、農閑期のこの町は楮市と紙市でにぎわった。ここでどんな紙が漉かれたかというと、杉原、芳書、目録、紙布紙、寄紙、障子紙、提灯紙、鼻紙、塵紙などで、いろいろの品種と品質の紙であった。そして、御前紙漉きの漉いた極上質の紙は藩主（伊達家）と領主（片倉家）の御用紙になり、また、幕府、公家、大名への献上紙、進物紙となった。



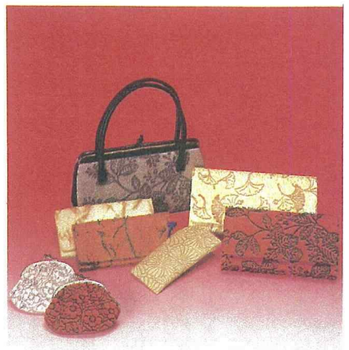
◀紙を漉く遠藤忠雄さん

しかし、徳川幕府の崩かいと明治維新は、白石の製紙業に甚大な影響を与えた。そして、日清戦後の明治三十年ごろから紙漉き農家の数は急激に減り始め、昭和四、五年ごろの不況時代に、さらにまた急激に減り、その後また歯が欠けるように減っていって、現在では鷹巣の遠藤家たった一軒である。この家では、従来の障子紙のほかに、新しい時代の用途に応じて、いろいろの紙を漉き、仙台、東京、大阪、札幌などの特別の依頼者に出している。

白石紙の応用品

白石紙の応用品として紙子と紙布とがある。紙子は楮の皮を材料として漉いた、厚くて丈夫な和紙に加工して、織物の代用品として、いろいろの用途に当てたものである。昔、紙子には茶羽織、袖なし、寝具、合羽、頭巾、丸帯など、さまざまな用途があった。現在、白石和紙工房（遠藤家）と、佐藤忠太郎紙子工房と、吉見紙子工房で、紙子の茶羽織や袖なしのほかに、襖の腰張紙、壁紙、札入、名刺入、ハンドバックなどを昔ながらの方法で作って市販している。

また、紙布とはタテに絹糸、ヨコに紙糸を使って織る高級織物のことで、旧藩時代、伊達藩片倉領の城下町であった白石で独特の発達をとげたのである。



▲昭和紙工房の作品

紙布には、平織、袴、袿、手拭い、小物入れなど、いろいろの用途があったが、この織物の性質からいって夏の着物が特に多かった。この名物織物も和紙と同じような運命をたどり、大正の初めごろには完全に衰滅したのである。しかし、昭和十二年に白石の有志が集り、非常な苦労の結果、復興し、一時は時代の脚光を浴びたが、終戦後、衣類事情が好転、安定するに従って、せっかく復興した紙布も、その真価が全然認められずに、再び衰滅の不運に会い、昭和二十四年の秋には経営困難のために生産中止のやむなきにいたったのは残念である。

しかし前に書いた白石和紙工房で、木綿糸をタテにして、わずかながら、この織物をつくっている。

空からこんにちわ（写真提供毎日新聞社）

市制施行三十年記念作文

はなぞのこうえんがほしいなあ

大鷹沢小学校一年
やまざきじゅんこ

わたしは、はなぞのにかこまれたこうえんが、しろいしにあればいいなあとおもいます。マーガレットやチューリップ、ひまわりのはなが、きれいだとおもいます。

そのこうえんで、おじいさん、おばあさん、こどもたちが、いっしょにあそべたらいいとおもいます。

こうえんには、ぶらんこ、ジャンボすべりだい、ロープウェイがあったら、おもしろいなあ。

わたしのおばあちゃんは、八十さいですが、ぴょうきのために、あしがふじゆうになり、はをうごかすだけで口がきけません。まいにち、いえのなかにばかりいます。ちかくのガソリンスタンドの、のりこおばちゃんが、ひるま、かんびょうにきています。わたしは、ばあちゃんを、うつくしいはなぞのこうえんにつれていってやりたいです。はなをみせたり、わたしやおとうとがあそんでいるところをみせたり、してあげたいです。ばあちゃんが、ゆっくりやすめるひかげのところも、つくってほしいなあとおもいます。

大たかさわしょうがっこうでは、はるのえんそくで、ふぼうがくえんへいきます。そして、大たかさわしょうがっこうの一・二ねんせいと、ふぼうがくえんのともだちといっしょに、うたをうたったり、えをかいたりしてきています。大たかさわしょうがっこうの、がくしゅうはっぴょうかいのとき、くるまいすにのって、みにきた人もいました。

はなぞのこうえんにひろばがあって、ふぼうがくえんのひとが、じぶんでくるまいすをおしたり、だれかにおしてもらったりする、うんとひろいところがあればいいです。にちようびになったら、いつもそこにあそびにいこうとおもいます。

はやく、はなぞのこうえんができたらいいなあ。

片平観平と白石の水

大平小学校六年
高橋　和美

白石市は、水の町といわれるとおり、町中いたるところに、きれいな川が流れていて、生活用水や防火用水に利用され、下流は、町はずれから田んぼに流れ、水田に欠かすことのできない水となっています。

わたしは、なぜ、こういう水の町になったのか、母に協力してもらって、調べてみました。

藩政時代の文化・文政のころ、じゃぶちの下のところにつくったせきを、たびたび大水でこわされ、水の取入口に、水がこなくなりました。片倉家は、もっと上流に、水の取入口をつくろうとしましたが、たいへんお金がかかることなので、工事ができなかったそうです。

そのあたりの岸は、かたい岩のがけになっていて、白石川の水を引いてくるには、そこをくりぬかなければなりません。今のような機械やダイナマイトがないので、のみとかなづちだけで、長いトンネルをほったのは、片平観平という人です。文政十三（天保元）年から四年の年月と、数百両の自分のお金を使って、完成させたのだそうです。

工事を完成させるだけでも、むずかしかったのに、自費で、白石を、少しでも大きな、豊かな町にしようとしたのは、とてもりっぱだと思いました。

観平がほった地下の水路は、じゃぶちから上の方にあり、白石が栄えたのも、この水のおかげだそうです。昔は、町内のあちらこちらで水車を作り、その水車で米をついたり、粉をひいたりしました。そしてその粉で、うーめんをつくりました。白石市で、うーめんつくりが盛んなわけが、よくわかりました。

その後、明治末期に、渡辺佐吉という人が、片平観平と同じように自費で、じゃぶちにえん堤をつくりました。えん堤というのは、せきと同じで、川の水を止めるダムのようなもので、観平がほったトンネルの水だけでは不足になった分を取り入れるために、石畳のようにつくったものだそうです。

そのえん堤が、三十年ぐらいたった昭和十六年七月の大こう水でくずれて、流されてしまいました。それで今度は、朝倉松吉、原勇太郎、銭谷周治郎という人が中心になり、十年の年月を費して、今のじゃぶちえん堤を、昭和二十六年に完成させました。

その完成記念碑が、昭和五十一年四月に、じゃぶちの入り口の所に建てられました。その除幕式で、ひもを引いて除幕したのは、わたしです。当時、わたしは四才でしたが、よくおぼえています。

このように、白石市を水の町にそだてあげた人びとの努力があったからこそ、わたしたち市民は、毎日毎日を豊かな水とともにくらすことができるのです。昔は、今のような機械や材料がありませんでした。昔の人の知恵と努力と苦労で、何度もつくり直しながら、今の水の町、白石をつくったのです。

でも、わたしが四才の時にひもを引いた記念碑の除幕式が、片平観平にまでつながりがあったとは、思ってもみませんでした。調べているうちにわかっておどろきました。白石市のためにつくした片平観平は、わたしの心の中で、これからずっと生きつづけるにちがいありません。そしてわたしも、観平のような仕事はできないとしても、少しでも人の役に立つことをしていこうと思います。

ぼくの白石

白石中学校二年
佐藤　健智

ぼくは、白石に来て、十二月で二年がたちます。父が営林署に勤務しているので、今までに、岩手県・宮城県の各地を引っこしてきました。ぼくが生まれたのは岩手県水沢市で、すぐに釜石市へ引っこし、宮城県気仙沼市、岩手県江刺市、そしてこの白石市へと移ってきたのです。

ついこの前、気仙沼市が市制施行三十周年をむかえましたが、この白石も、市制三十年ということで、うれしく思います。二年しか住んでいないぼくですが、「住めば都」で、自分の住んでいる町のよい事は、やはりうれしいものです。

ぼくが白石に来ての第一印象は、落ちついた町だなぁ、ということでした。城下町だったせいでしょうか。市内いたるところに史跡や旧跡があり、おもしろいのです。

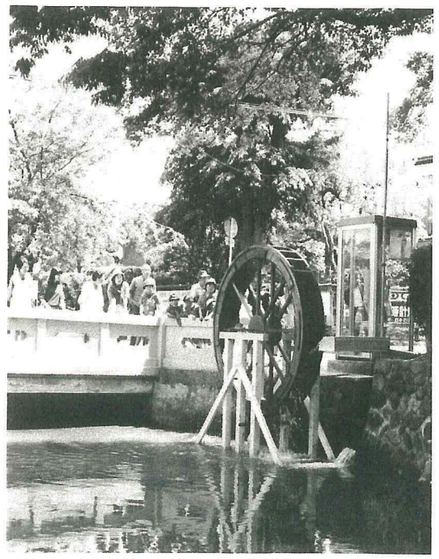
益岡城跡は、その代表でしょう。広い白石の中で、ぼくは、あそこが一番、気に入っています。あそこから市街地をながめるのは、最高です。江戸時代、片倉家代々の殿様も、その当時、同じようにして白石の町をながめたことでしょう。ところが、明治になって、お城はとりこわしになったそうで、非常に残念です。

関心を呼んだこともあります。白石と札幌市白石区の関係です。これは、片倉氏と、その家臣と家族が、北海道に入植、開拓し、そこを白石村としたのが始まりと聞きました。すごくロマンに満ちあふれた話だと、ぼくは思います。しかも、百年前に先祖が開いた土地から、その子孫が、白石へ訪ねてくる。劇的でさえあります。今では、本家より分家の人口の方が、ずっと多いようですが、札幌市が現在のように発展した訳の一つに、白石の人々の限りない努力があったというのです。

そのほか、感じたことを述べたいと思います。

白石へ来て六か月ほどたった去年の五月に、あの「こけしコンクール」がありました。その時の売店の一つに、Tシャツを売っている店がありました。あの「MY TOWN SHIROISHI」のです。あの運動を行なったのは、青年会議所でしたでしょうか。ずいぶん活発な市だなぁ、と思ったものです。今まで各地をまわってきましたが、こんなに青年会議所が活発に活動している市も珍しいと思います。

待望の新幹線も開業しました。おかげで、日通工などの大企業も進出し、白石の発展に、様々な影響を及ぼすことでしょう。が、ぼくとしては、あの白石蔵王駅の駅前は、どうも気に入りません。駅のまわりが住宅ばかりというのは、駅から出て来た人々にとっての印象も、あまり良くないのではないでしょうか。ぼくは、あそこは商店街になるものだと思っていました。駅が在来線の駅とはなれているせいでしょうか。



このほか、不便な点もあります。城下町のせいか、道はばが狭いようです。特に駅前や中町のあたりは、車が混雑していて、かなり危険なような気がします。自転車などでは、安心して通れません。道を広くする、よい方法はないのでしょうか。

ぼくは白石に、すばらしい近代都市として、しかし古くからの文化遺産との調和のとれた都市として発展してもらいたいのです。

ぼくは、いつ、どこへ引っこすか分からぬよそ者ですが、再び白石を訪れたとき、白石はすばらしい街に発展したなぁ、といえるような都市に発展して欲しいのです。宮城県の表玄関、白石市が、三十年間の足場づくりを終え、これから、どのように飛躍するか、大いに楽しみです。

白石市、市制施行三十年に思う

白石高等学校二年
郡山　善信

「白石」と言えば、温麺・こけし・和紙・蔵王が、純朴清楚なイメージと共に、思い浮かんできます。この白石が昭和二十九年に白石町他六ヶ村が合併（三十二年に小原村が編入）して、白石市として再発足してから、はや三十年が過ぎ、行政機構も飛躍的に拡大して、古きよき伝統を保持しつつ、街の様相もすっかり近代化されました。市制施行三十年目を迎え、伝統のある白石市を、新たなる気持ちで展望するのは、意義の深いことです。

白石市には、古きものと新しきものが調和し共存していますが、その伝統と創造の精神の発揚を、例えば毎年開催されている「全日本こけしコンクール」や、昨年壮大な南蔵王高原で華々しく挙行された「日本ジャンボリー」に端的に見ることができます。前者では、伝統工芸の育成促進に、後者では、未来を担う若人の人格形成に、白石市は大きな役割を果たし、全国的にも白石市の名を高らしめています。

地方都市としての白石市は、県南の中心都市であり、常に周辺の市や町に大きな影響を与え、指導的な役割を努めてきました。今後とも県南の開発と発展に、牽引車としてのより一層の活躍を期待したいものです。

白石市は、主として商業中心に発展してきましたが、工業、観光などの面で、まだまだ発展する余地があることは言うまでもありません。

工業面では、地域の環境を保全しつつ、時代のニーズに対応できる工業を導入していくべきでしょう。それら工場の誘致には、何といっても交通の便が要求されます。白石市には新幹線駅もあれば、高速道路のインターチェンジもあるのですが、今のところ、それらが十二分に活用されてはいないようです。特に新幹線駅前の整備開発は、工業ばかりでなく、商業や観光など、すべての産業に影響を及ぼすし、また高速化社会を迎えての地域住民の足に影響することでもあるので、更に整備し、利用しやすくして欲しいものです。また地下鉄やモノレールなど、交通のニューメディアを導入すれば工業以外の企業の進出にも役立つし、地域内の経済も活発になるに違いありません。

観光面では、優れた自然の景観や、特色ある地場産業の製品を、国内は勿論、国外にも積極的にPRすべきです。雄大にして細やかな美に溢れた蔵王、神秘的な幽玄美を秘めた小原渓谷や材木岩、清冽な白石川など、白石は多彩明媚な風光に恵まれています。機械文明によって自然破壊が一層進み、宇宙空間都市への移住が始まるかもしれない二十一世紀を迎えるにあたって、市民がこれら自然に対する認識を更に深めるのも大切なことです。

地場産業の弥治郎こけし、温麺、手漉き和紙などは、手作りの素朴さや、芸術性において、個性重視の現代社会では非常に価値あるものです。しかしこれら伝統工芸の中には、それを受け継ぐ人が不足しているものもあると聞きます。特に和紙については、その技術が途絶えてしまうのではないか、とても気掛かりです。観光の目玉の一つでもある伝統工芸を、更に育成発展させて頂きたいものです。

そして、観光業が他の産業と同じくらい盛んになれば、周辺地域の発展にも大いに役立つことと思います。

また白石市は、伊達家の名臣片倉小十郎景綱の下で城下町として栄え、明治維新の時には、奥羽越列藩同盟の本拠地になるなど、歴史的に非常に魅力のあるまちです。白石城跡を初めとして、武家屋敷、甲冑堂、孝子堂など、由緒ある史跡に富んでいます。しかし白石市には、これらの史跡を研究できるような本格的な歴史資料館はありませんし、郷土物産館とか美術館などの文化施設も完備しておりません。他に市の総合運動場や体育館を含め、文化やスポーツの諸設備の建設を、長期計画でもよいですから、是非達成してください。同時に、過去の伝統を受け継ぎ、将来の白石市及び県南地域の文化水準を引き上げるためにも、大学の誘致は、ぜひ実現させるべきでしょう。そのために、市当局と市民が一体となって、誘致運動の気運を盛り上げていくのもよいでしょう。

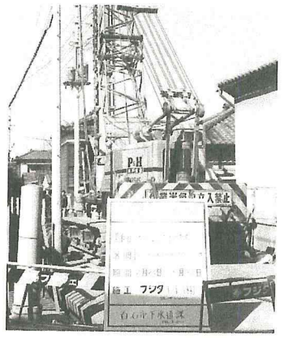
ところで、二十世紀に我々が犯した最大の過ちは、高度な物質文明を望むあまり、我々の生命の源である自然を保護することを、半ば忘れていたことです。二十一世紀の行政を進めていくにあたっては、産業、文化、自然など、あらゆる面で調和のとれた発展をしていくようにして欲しいものです。また当然のことながら、住民もこれを見守りかつ積極的に協力していくことが大切でしょう。

最後に、白石市は地域に定着した住民が多いので、まちとしてのまとまりはできやすいと思います。この利点を生かして、将来、人口が増加するような場合でも、市民の和、地域住民の和を保持拡大してもらいたいものです。この下からの力が、内に秘めた創造的な可能性を、現実のものとして引き出してくれる最大の力となるのですから。

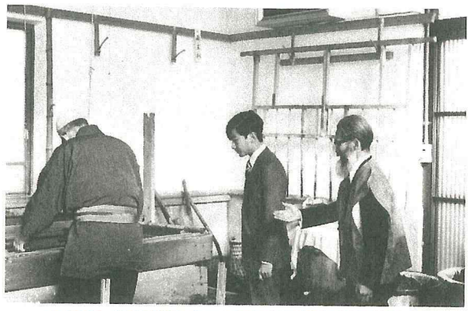
10年をふりかえって

▲49年　白石駅跨線橋完成

▲48年　東北縦貫道白石～南仙台間開通



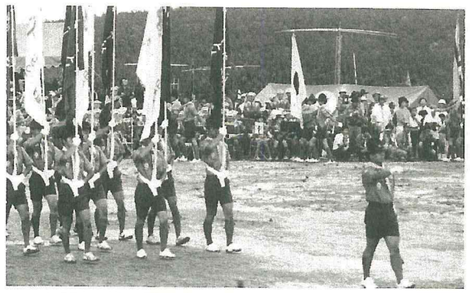
◀51年　下水道工事着工



▲50年　浩宮様来白・手すき和紙など見学される

▲54年　健康センターオープン

▲53年　宮城県沖地震



▲57年　第８回日本ジャンボリー南蔵王で開催

▲57年　東北新幹線白石蔵王駅開業

市制施行30年
記念カメラの目

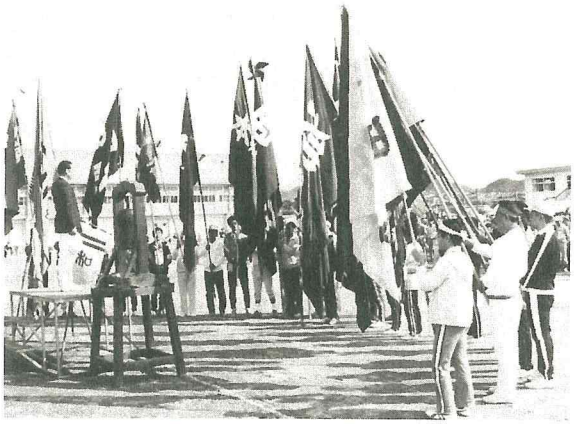
メインテーマ

水、時、人の流れに沿って

▲健康づくり（ラジオ体操）

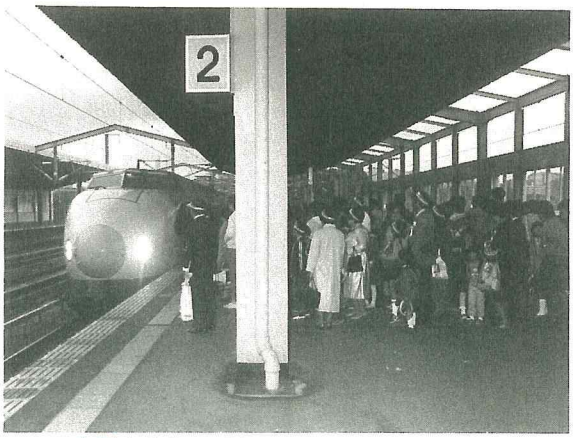
▲まちづくり（シンポジウム）

▲教育を考える（講演会）



▲コミュニティーづくり（体育大会）

▲農林業を考える（農業祭）



▲交通を考える（市民号）